

秋田県仙北市無形民俗文化財「生保内田植踊り」に関する研究

－ 起源と伝承概要，唄をめぐって －

吉澤 恭子

Etude sur la danse de la plantation du riz d'Obonai, bien culturel folklorique immatériel appartenant à la ville de Semboku du département d'Akita

－ Origine et aperçu de cette tradition accompagnée d'un chant populaire －

YOSHIZAWA, Kyoko

Résumé

Parmi les cultures apportées par le département d'Iwate, autour de 1830, dans le quartier d'Ishigami d'Obonai, la danse de la plantation du riz d'Obonai (Obonai Taië Odori) est un art de tradition populaire classé au titre de bien culturel folklorique immatériel en 1997 par la ville de Semboku du département d'Akita. Cet art populaire fait partie de son patrimoine. Cette danse mime les gestes des cultivateurs de riz. La gestuelle est soutenue par un chanteur. Cinq instruments de musique (flûte traversière japonaise, shamisen, suri-gong, tambour à main, tambour japonais) accompagnent la performance.

On pourrait dire que la danse de la plantation du riz d'Obonai n'appartient pas à la catégorie des "arts traditionnels" qui sont largement représentés dans la région du Tôhoku, région agricole qui produit du riz, alimentation de base pour les Japonais. Le présent article est focalisé sur l'origine et l'étude de la tradition de la danse de la plantation du riz d'Obonai. Cette étude a été rendue possible grâce aux manuscrits conservés par l'Association de la danse de la plantation du riz d'Obonai, et aussi grâce aux recherches menées autour du chant populaire accompagnant la danse. Nous avons analysé les textes et la musique du chant populaire de la danse de la plantation du riz. Nous avons pu réaliser une partition qui est à la base d'une ressource audio originale de référence où l'on peut retrouver, au premier plan, les caractères de tradition orale.

Mots-clés: danse de la plantation du riz d'Obonai, Minyo (chant populaire japonais), tradition populaire, art folklorique et populaire

はじめに

秋田県仙北市田沢湖町生保内石神地区には、2つの民俗芸能「石神番楽」と「生保内田植踊り」がある。「石神番楽」は平成7(1995)年10月5日に、「生保内田植踊り」は平成9(1997)年6月3日に、仙北市無形民俗文化財に指定された。平成23(2011)年3月には「石神番楽田植踊り発祥の地」と書かれた木製の記念碑が、石神会館駐車場付近に設置された(写真1:筆者撮影2019/08/15)。平成12(2000)年より生保内田植踊り保存会会長を務め、田沢湖、西木地域の民謡・民舞の文化伝承に力を注いだ田口幸治氏¹が発案し、石神地区の住民らの協力により実現した。記念碑は地域社会が共に歩んできた、民俗芸能へのオマージュである。

秋田県は郷土芸能の宝庫である。秋田県の民俗芸能調査および報告書等の編集に携わってきた秋田県教育庁・

秋田県教育委員会では、平成27(2015)年度から秋田県内の小学校等で民俗芸能を公開し、小学生と保存団体が交流する民俗文化財公開交流事業を実施している。本



写真1 木碑



写真2 演目《生保内田植踊り》の様様

事業の趣旨は「民俗芸能を小学校等で公開するとともに、その果たす役割や地域にとっての意義などについて解説することによって、児童生徒の民俗芸能を伝承しようとする意識を高め、後継者を育成しようとするもの」²とする。この事業には、「保存団体による民俗芸能の公開および児童との交流」「県教育庁文化財保護室職員による民俗芸能の役割や見どころ等についての解説」が含まれる。

田沢湖町生保内石神地区の2つの民俗芸能「石神番楽」「生保内田植踊り」は、令和元(2019)年10月23日(金)に、同事業の一環として生保内小学校で披露され、全校児童183名が交流会に参加した³。「生保内田植踊り」の演目では、生保内田植踊り保存会会員が唄とお囃子(横笛、摺鉦、太鼓)を担当し、生保内小学校の児童5名が踊り手として出演した(写真2:筆者撮影2019/10/23)。踊りの指導は、40年もの間、地域の小中学生に指導を行ってきた保存会会員・中島弘子氏である。こうして、生保内田植踊り保存会による民俗芸能の公開および児童との交流が実現した。

《生保内田植踊り》は唄・お囃子・踊りで構成される。唄は民謡《生保内田植踊り》、お囃子の音楽は5種類の楽器奏者(横笛、三味線、太鼓、摺鉦、鼓)が担当し、数名の踊り手(代掻き、苗担ぎ、早乙女、大足、型付け等)で演じられる。中学校音楽科「A表現」の内容として、歌唱教材において「我が国の伝統的な歌唱のうち、地域や学校、生徒の実態を考慮して、伝統的な声の特徴を感じ取れるもの」の一つに郷土の民謡があげられる。小学校中学年以降の器楽活動に関わる「指導計画の作成と内容の取扱い」では、和楽器の実践も児童や学校の実態を考慮して選択が可能である点に加え、中学校音楽科では3学年間を通じて1種類以上の和楽器実践を必修としている。和楽器を用いた表現活動を通して、我が国の郷土の伝統音楽のよさを味わう実践経験を、児童生徒に提供することが求められている。さらに小学校体育科と音楽科との合科的視点をもつフォークダンスには、日本

の民踊⁴が含まれる。日本の民踊は、中学校体育科においても「Gダンス(1)ダンスの特性や由来、表現の仕方」を学ぶ機会へと繋がっていく。

音楽科の視点から、唄(歌唱)・お囃子(器楽)・踊り(身体表現)の3拍子揃った題材性の魅力から、本研究では秋田県仙北市無形民俗文化財「生保内田植踊り」に着目した。

桂(2015)の仙北市の民俗芸能に関する調査報告書を始め、「生保内田植踊り」に関する先行研究は少ない。Webサイト上で無料公開されている国際教養大学(2013)『秋田民俗芸能アーカイブス』では、《生保内田植踊り》の映像が視聴できる。しかしこれらの先行研究では、音楽と踊りに関する情報を欠いている。また市販の田植踊りに関する民謡(録音物)や民謡の伴奏楽器である三味線以外に現存する記譜がほとんどない。生保内田植踊り保存会でも、長きにわたり口頭伝承されてきた芸に関する記録や記譜・楽譜等が作成されてこなかった。現在、60代後半から70代前半で構成される生保内田植踊り保存会会員の高齢化、過疎化・少子化による担い手不足にコロナ禍が拍車をかけ、2020年度以降、生保内田植踊り保存会活動は中止されている。

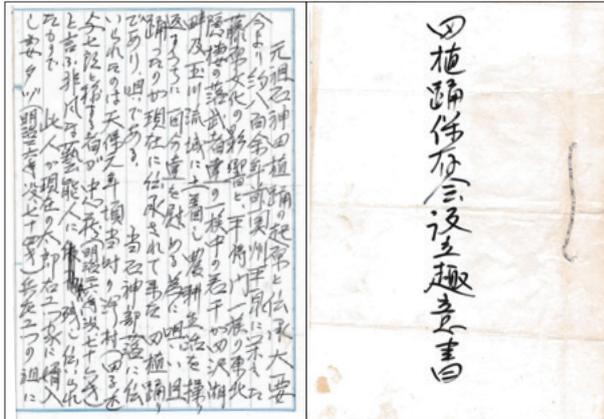
本研究は2021年11月から2022年11月にかけて実施した現地調査をふまえ、生保内田植踊りの起源と伝承概要について把握すること、岩手県の伝統芸能「田植踊り」の歌謡にみられる歌詞との類似性から、生保内田植踊り唄の伝承ルーツを探ること、さらに現在、伝承の源とされる田口キヨノが歌う《田植踊りうた》の音源資料から楽譜化を図り、音楽的特徴を考察することを目的とする。なお歌・唄・うたは、文献資料の記載方法に基づく。

1. 生保内田植踊りの起源と伝承概要

東北地方の4県(岩手県、福島県、宮城県、山形県)には、数多くの伝統芸能「田植踊り」が存在する。秋田県には、仙北市無形民俗文化財「生保内田植踊り」がある。県唯一の「田植踊り」と見なされているが、東北4県にみる「田植踊り」のカテゴリーではない⁵。伝承ルーツが異なり、中世に起源をもつ稲作芸能の一種である「田遊び」に分類されている。「一連の農作業を再現して豊作を祈願する『田遊び』が、東北では娯楽的な要素が加わって芸能化し田植踊りになった⁶とも伝えられている。

平成25(2013)年の名簿録から、2022年11月の時点で死亡、施設入居等を除き、生保内田植踊り保存会は29名の会員で運営されている。同保存会(1997年に田植踊石神保存会より改称)が保管する2つの資料、昭和44(1969)年2月25日作成『元祖田植踊石神保存会々則(案)』、その3年後の昭和47(1972)年2月15日に作成された『田植踊保存会設立趣意書』(資料1)がある。

この『田植踊保存会設立趣意書』冒頭に、元祖石神田植踊りの起源と伝承大要（資料2）⁷が書き記されている。またこの『趣意書』には「元祖石神田植踊保存会」の設立理由として「曲の異なる田植唄が中生保内にも伝いら



資料1 (右) 田植踊保存会設立趣意書表紙
(左) 元祖石神田植踊りの起源と伝承大要・1頁
(生保内田植踊り保存会所蔵)

れた相だが、現在之を唄う者もなく氏の儘忘れ去られるのに心から遺憾を感じている。以上の歴史を考えて、是を失う事に心からの悲しみを覚い、此処に石神田植踊保存会を結束する事となり、理解と熱意ある有志の御賛同を得て、保存と発展と伝承に全力を注ぎ度く、発起人として懇願するものであります。」と記されている。1972年の保存会設立時には、伝承されてきた唄と異なる唄の存在、唄い手不足により、地域が育ててきた芸能の保存と存続を祈念することが理解される。元祖田植踊りの完成後、現在に至るまで『生保内田植踊り』が伝承されてきた背景に、唄・三味線の弾き語り・歌いによる田口キヨノ氏（1920-1990）の活躍が語り継がれていることから、いくつかの資料を手掛かりに、唄のルーツを探りたい。

2. 田植踊りー歌詞から伝承ルーツを探る

平成22（2010）年10月、仙北市民会館（秋田県仙北市田沢湖生保内字武蔵野105-1）駐車場付近の一角に、田沢湖を代表する3つの民謡『生保内節』『長者の山』『生

資料2 元祖石神田植踊りの起源と伝承大要

今より約800余年前奥州平泉に栄えた藤原文化の影響と、平将門一族の東北隠棲の落武者達の一族中の若干が田沢湖畔及玉川流域に土着し、農耕生活を繰り返すうちに自分達を慰める為に唄い且踊ったのが現在に伝承されて来た田植踊りであり、唄である。石神部落（現仙北市田沢湖町生保内石神地区）に伝えられたのは天保元年（1830年）頃、当時の瀧村（田子ノ木）与七郎と称する者が、忠義（明治26年没76才）という非凡な芸能人に残し、伝えられた。此人が現在の太郎右エ門家に婿入りし、妻タヅ（明治26年没74才）兵右エ門の姐に伝い是が姪のイソ（明治34年没39才）に伝え、是から千葉清四郎（現正敏氏の祖父）妻キネ（中生保内善五郎より入）と伝えられた。

当時は主としてサナブリ⁸ 祝いの踊として 箸や皿や空椀等を叩き調子を合わせ楽器とし、手拍子揃いて唄い且つ踊ったものである。箸を持ってエンブリ⁹ とし、足に縄を結んで大足踏み¹⁰ を真似、苗乙女は両手に箸を持って苗として伝承された。又嘉永元年（1848）頃、南部¹¹ より砥石や干魚を行商に来た伊セノ準（俗称）と言ふ男が、此の唄も踊りも巧みであり、これと組み合わせてほぼ完成に近いものを演舞する様になった。キネが長女オトク（奎孜の祖母）に伝い、夫を辰造（兵右エ門父）妻オモト（生家茂吉）と田口アサノ（治義の祖母）の3名に伝授する。当時の芸能人田口重郎難波（宿に婿入）の唄で 昭和の初期から郡外出て舞台上で踊る様になる。是を受け継いだ千葉兵右エ門の太鼓と唄及び田口織五助妻キヨノの三味線で、田植踊りが完成した。

資料3 民謡碑（左）・石碑に刻まれた全文（右）



民謡王国・秋田の中でもここ田沢湖は、民謡や郷土芸能の宝庫として知られている。生保内盆地を吹き抜け、秋の稔りを約束する宝風が生保内節を生み、長者の山は玉川が発祥の地と伝えられ唄い継がれてきた秋田を代表する民謡である。

また、生保内田植踊りは田植の所作を踊りに組み入れた県内唯一の田楽であり、全国を例に見ない珍しい郷土芸能といえる。

この地で生まれ育まれたこれらの優れた民謡や郷土芸能が永く後世に継承されることを願い民謡碑をここに建立する。

平成22年10月 民謡碑建立実行委員会

保内田植踊り》を讃え、民謡碑が建立された（写真3：筆者撮影 2022/11/21）。民謡とは、地域に根ざして人々に歌い継がれてきた唄である。民謡《生保内田植踊り》の音楽に合わせて踊る「踊り」を伝えたのが、明治9（1876）年に岩手県雫石町から中生保内の善五郎家に嫁いだマンという女性である。¹² 上述した『田植踊保存会設立趣意書』にはマンという人物名の記載はないが、踊りは、マンの姪であるオトクが嫁いだ生保内石神地区を中心に伝承されていった。オトクの孫が、生保内田植踊りの伝承者・中島弘子氏である。

マンの出身地名「岩手県雫石町」を手掛かりに、現在岩手郡雫石町下長山に《葛根田田植踊り》¹³ が存在することが分かった。岩手県内には数多くの伝統芸能「田植踊り」があるが、一体「田植踊り」とはどのような芸能であるのか。森口（1971：1089）は「もともとは小正月（または正月）に行われる予祝芸能で、稲田耕作作業や収穫作業を模する所作を舞踏化した風流、つまり類感呪術を底にひそめた農民芸能」と説明する。¹⁴ 現在一般公開されている映像資料から、《葛根田田植踊り》は現在の《生保内田植踊り》とは全く異なる芸能であることが確認できる¹⁵。

「生保内田植踊り」のルーツはどこにあるのか。「唄」に関しては、盛岡（南部）の踊り唄が生保内地方に伝えられ、その地に定着したという説が一般的である。「細々と唄いつがれてきたが、田沢湖町の保存会が取り上げ、踊り唄として振り付けをしてから息を吹き返した唄である」¹⁶ という見解もある。「田遊び」の娯楽化を解釈するならば、生保内地方の民謡《田植踊り唄》に農作業の手順を単純にし、その踊りと一体化した演出によって、桂（2015：78）が指摘するように「地元らしさ」「田舎らしさ」を象徴する民俗芸能「田植え踊り」が形成されていったのかもしれない。

2.1 田植踊りに用いられる歌謡の歌詞をめぐって

秋田県内には、田植に関する唄がある。それらの唄は、生保内地区に伝わった盛岡（南部）の踊り唄と関連性があるのだろうか。生保内田植踊りのルーツに、唄が何らかの影響を与えたのではないかと仮定し、岩手県の伝統芸能「田植踊り」に用いられる歌謡の歌詞に関する資料ならびに秋田県の「田植歌」や「田植踊り唄」等に関する資料をもとに考察する。

（1）岩手県の伝統芸能「田植踊り」の構成、歌謡歌詞との類似性

岩手県が有する伝統芸能「田植踊り」には、歌謡（詩章と曲節からなるもの）をとまなう種々の演目がある。長野（2007：200）の研究によると、「歌謡をとまなう種々

の演目」とは、その全てが田植えの場で演じられることから考えて、田植え作業を模した演目の一種と見てよいとしている。演目には、「朝よはか」「昼や持ち」「夕暮」という朝・昼・日暮をあらわす演目が認められる。演目の流れは「朝よはか」→田植え（歌謡をとまなう種々の演目）→「昼や持ち」→田植え（歌謡をとまなう種々の演目）→「夕暮」となる。真壁昌弘氏が既に指摘している「一日の田植歌を朝歌・昼歌・日暮歌に分け、それぞれに伝統的な式歌・役歌を一首ない数首あてがう形式」（真壁，1992：153）に該当し、朝・昼・日暮の歌謡による作業組織を、田植え踊りの中に読み取ることができる。

長野（2007：201）は、岩手県北上市《口内田植踊り》の演目冒頭「朝よはか」が、以下の詩章でうたわれることを紹介している。

朝ヨはかの水の口に 生いたる松は何ヨ松
何ヨ松と人問わば 御祝いたてた若松
若ヨ松の一の枝 とまる鷹は巢かけ
巢の中をのぞいて見れば 子持ち鷹は九ヨのつ
一つをばお上へ参らせ 八つで長者とさええず
(岩手県北上市「口内田植踊り」)

この《口内田植踊り》の演目冒頭「朝よはか」の歌謡をもつ類歌として、長野（2007：201）は、秋田・岩手・福島・新潟・千葉などの《田植え歌》を挙げている。その根拠となったのは、1962年刊行『秋田県史』（民俗・工芸編）に掲載された秋田県仙北郡田沢湖町の《田植え歌》である。

朝よはか、一の水の口老いたる松は何松。
何よ松、人は問わば、祝い、祝いたてる若松。（後略）
(秋田県 1962年 633頁)

その他、岩手・福島・新潟・千葉の《田植え歌》との共通点は、田植え作業にうたわれる際には、ほとんどの場合「朝」という語からうたい出される点を指摘する（長野，2007：202）。「朝」からうたい出される場合、田植え作業を意識していたと考えられ、「朝」という時も意識されていたとも考えられるとする。田植踊りでは、「朝よはか」は朝の田植えを組織すると思われるとの見解を示している（長野，2007：202）。

2.2 岩手県北上市《口内田植踊り》から「朝よはか」の詩章との類似性

岩手県北上市《口内田植踊り》の演目冒頭「朝よはか」の詩章との類似性を手掛かりに、1962年以降に刊行された3つの書物から、秋田の田植歌/唄・田植踊り（り）唄に関する歌詞情報を確認したい。

(1) 秋田の田植歌 (昭和 43 (1968) 年)

無形民俗資料として特に重要な農業県である秋田県の田植に関する習俗を調査した報告書『秋田の田植習俗』に、仙北郡田沢湖町生保内の《田植歌》の歌詞が紹介されている¹⁷。「生いたる」と「老いたる」の表記の違い以外、岩手県北上市《口内田植踊り》「朝よはか」の詩章と類似する。また新たな歌詞（よぶもよんだしよばれましたや朝日長者とよばれた）が、最後列に確認される。

朝よはか 一の水口老いたる松は何松
何よ松 人は問わば 祝い 祝いたてる 若松
若よ松の 一の小枝に 殿の鷹が巣をかけ
巣の中の いてて見れば 子供鷹は九つ
一つとりて 何にまいらす 八つを長者とよばれた
よぶもよんだし よばれましたや朝日長者とよばれた
(『秋田の田植習俗』 1968, pp. 25-26)

(2) 田植踊唄 (昭和 55 (1980) 年)

「田植踊唄」の名称で掲載されている『秋田県民俗芸能誌』の編集委員に、秋田県民俗芸能協会会長であった田口秀吉氏 (1901-1991) の名が確認される。唄について「陸奥藤原氏全盛時代、農民耕作の労を慰めるため作られたものと伝えられる。踊りの原型は田楽で二十人位の構成であったというが、いまは繁雑さを脱して地方色豊かなものとなり、ユーモアに富み曲調も軽快陽気、生保内だけに残る民俗芸能である。調子は二より。」¹⁸との説明がある。「調子は二」とは横笛の調子 (二本調子) を意味すると解釈できることから、生保内田植踊り音楽のお囃子楽器に関する情報、踊りと曲調の様子が窺い知れる。唄の歌詞冒頭に「ソレナヤーエ」、1行目最後に「ソレ ソレ ソレ ソレ」が加わっている点以外は、《口内田植踊り》の演目冒頭「朝よはか」の詩章と類似する。そして「秋田の田植唄」と同様に6番の歌詞がある。

ソレナヤーエ 朝よはかの 一の水な口に生えたる松は何松
ソレソレソレソレ
ソレナヤーエ 何よ松と 人は問わば 祝い立てたる若松
ソレナヤーエ 若よ松の 一の小枝に殿の 鷹は巣をかけ
ソレナヤーエ 巣よの中を 探り見れば 子持ち鷹は九つ
ソレナヤーエ 一つをば 外に参らせ 八つで 長者と呼ばれた
ソレナヤーエ 呼ぶも呼んだし 呼ばれましたや 朝日の長者と呼ばれた
(『秋田県民俗芸能誌』 1980, p. 184.)

(3) 秋田民謡: 田植唄と田植踊り唄 (昭和 55 (1980) 年)

1980年に刊行された『むかし、いま 秋田民謡』は一般書である。「田植え」に関する唄が「むかし」と「い

ま」に分けられている。「元唄編(むかし)」のカテゴリーには仙北地方、南秋田地方、山本地方に伝わる3つの《田植唄》が掲載されている。これらの唄の歌詞には、《口内田植踊り》の演目冒頭「朝よはか」の詩章との類似性はほとんどみられない。一方「現代民謡編(いま)」のカテゴリーには《田植踊り唄》が掲載されている。唄のタイトルに「踊り」が伴うこの唄について「古い本によると、奥州の藤原氏が全盛の頃、農民の労をねぎらう為に、冬に雪の上に松葉をさして田植に名ぞらえ、笛、太鼓の囃子をつけて、にぎやかに演じられたと記されている。いつの頃から、秋田地方に定着したかははっきりしないが、現在唄われているのはにぎやかな囃子に乗った軽快な節廻しの唄となっている。田植唄の名前から労働歌を思わせるが、祝い唄としての歌詞が多い所から、古い行事につながった祝いの唄であった事がうかがえる。この唄は田沢湖町生保内地域で唄われている。元唄は南部領雲石辺から山越えしたものの様で、秋田のものは田の「代かき」から収穫までを、当意即妙に振り付けしたものだが、岩手のものは三百年の来歴を持ち、踊りも三十作に分かれている。」²⁰と説明されている。

《田植踊り唄》の歌詞は、「元唄編(むかし)」のカテゴリーに掲載されている仙北地方の《田植唄》の歌詞と類似しているが、いくつか異なる点がある。まず仙北地方の《田植唄》には(アソレソレソレソレ)の記載がない。音を伸ばす表記(ー)の違い(ソーレナヤーエ/ソレナヤーエ)も明らかである。また1番の歌詞に確認される同音異義語(老いたる松/生えたる松)は、祝い歌である所以から「生えたる松」に修正されたと思われる点、歌詞の表記法(ひらがな・カタカナ)の違い、漢字または仮名に置き換えられた点、ソレナヤーエがソレナヤーエに変えられた点²¹、も確認される。さらに歌い手の発音を聞き取り、文字化する過程で生じたと思われる箇所(「なにを」の「を」と何よの「よ」)や、一部の歌詞が全く異なった形で残されている点(例えば1番の歌詞: 朝よはか 一の水口に / 羽賀の一の みなぐちに)を始め、歌詞の多様性が見える。

(アソレソレソレソレ)
ソレナヤーエ 羽賀の一の みなぐちに生えたる松はなに松
(アソレソレソレソレ)
ソレナヤーエ にを松つと 人は問わば 祝い立てたる 若松
(アソレソレソレソレ)
ソレナヤーエ 若ヨ松の一の小枝に 殿の鷹は 巣をかけ
(アソレソレソレソレ)
ソレナヤーエ 巣ヨの中をいでて 見れば 子持鷹は 九つ
(アソレソレソレソレ)
ソレナヤーエ 一つ取りて あとに まいらすやつを 長者と呼ばれた

(アソソソソソソソ)

〔むかし、いま秋田民謡〕より《田植踊り唄》1980, pp. 118-119.)

以上、岩手県北上市《口内田植踊り》の演目冒頭「朝よはか」の詩章との類似性を手掛かりに、秋田県の資料に確認される《田植歌》《田植唄》《田植踊り唄》《田植踊り唄》の歌詞との相違点や共通点が見られ、いくつもの歌詞のヴァリエーションが確認された。上述した資料では、根拠となった歌・唄の歌詞の採集地と唄い手情報等が明示されていないことから、伝承ルーツの考察において限界がある。

3. 伝承の源：田口キヨノが歌う《田植踊りうた》

長野(2007)の研究書の付録CDには、25の音源が収録されている。音源は、國學院大學歌謡研究会による岩手県旧江刺郡民俗歌謡調査での録音物を土台とする。《田植踊り唄》の歌詞と類似性をもつCD・第6曲《田植踊り》「朝よはか」(福岡, 1997年8月26日録音)および第9曲《田植え歌③》(梁川, 1989年8月24日録音)を聴く限り、筆者が現地調査で聞いた生保内田植踊り保存会のメンバーが奏でる生保内田植踊りの音楽ではないことが分かる。『保存会設立趣意書』の伝承大要に記載されているように、南部の唄の節に、岩手県北上市《口内田植踊り》の演目冒頭「朝よはか」と類似する詩章があてられて、現在にまで伝承されてきたのではないかと推測される。

田沢湖町郷土芸能振興会主催、田沢湖町教育委員会・田沢湖町公民館の後援で、CD『田沢湖の古民謡』が制作されている。田沢湖町郷土芸能振興会発足20周年を記念し、田沢湖町に古くから謡われた民謡を正しく後代に伝える目的で、29曲の演奏録音が残された。録音日は昭和56(1981)年6月30日、場所は田沢湖町民会館(現在の仙北市民会館)練習室である。当時オープンリールテープに録音され、その後、録音物は昭和57(1982)年にカセット・テープで田沢湖芸能振興会会員等に配布²²。後にCD化された。発行は昭和57(1982)年1月である。現在このCDに収録されている音源は、故田口秀吉氏(CD制作時、秋田県民俗芸能協会会長、田沢湖町郷土芸能振興会会長)の解説入りで、現在はYouTubeで視聴することができる²³。

CD『田沢湖の古民謡』に、生保内地方の芸能の伝承と普及に努めた田口キヨノ氏が歌う《田植踊うた》が収録されている。田植踊りを伝えたマンの姪オトクの孫である中島弘子氏は、田口キヨノの唄が、現在の生保内田植踊り音楽の源であるという²⁴。またYouTube(12田沢湖の古民謡)で故田口秀吉氏は「元々は南部の唄。生保

内に嫁入りした人が伝えたと言われる。非常に原型に近いまま保たれている。」と解説していることから、田口キヨノが演奏する音源資料から、うたの歌詞および音楽を記譜化するとともに、それらの特徴を把握したい。

3.1 《田植踊うた》の演奏者と歌詞

故田口秀吉は「奥州の藤原文化時代に農民の耕作の労を慰めるために作られたと言われる。遠野地区に栄え、北上しての奥羽山脈を越え生保内に入った時代は定かでは無いが、踊りは農作業そのまま生保内地区だけに残る独特の田植え踊り唄である。」と説明する。

平成5(1993)年6月に再発行されたCD『田沢湖の古民謡』のブックレットに、《田植踊うた》の唄は故田口キヨノ、伴奏楽器名・演奏者名の記載はないが、ブックレットの巻末に伴奏楽器・奏者名一覧がある。生保内田植踊り保存会会長・佐川隆雄氏からの情報²⁵を得て、音源は、唄・三味線(故 田口キヨノ)、太鼓(故 千葉兵右衛門)、すりがね(故 樋口福一)の演奏による《田植踊うた》である。

1. それなやーイ 朝よはか(が)の 一の水な口に
生いたる松は何松 ハ ソレソソソソソソ
2. それなやーイ なにを松と 人は問わば
祝いたてたる 若松 ハ ソレソソソソソソ
3. それなやーイ 若ヨ松の 一の小枝(こいだ)に殿の
たか(が)は巢をかけ(げ) ハ ソレソソソソソソ
4. それなやーイ 巢よのなか(が)を いでて見れば子持ち
たか(が)は九ツ ハ ソレソソソソソソ
5. それなやーイ 一つ取り あとに参らず
八ツを長者と呼ばれた ハ ソレソソソソソソ
6. それなやーイ 呼ぶも呼んだし 呼ばれましたや
朝日の長者と呼ばれた ハ ソレソソソソソソ
(『田沢湖の古民謡』より《田植踊うた》唄：田口キヨノ)

《田植踊うた》の歌詞はブックレットを参照しつつ、田口氏が歌う歌詞を明記した。()内には録音物から聴き取れる発音上の語を記載した。「え」が「い」に置き換わっている点、か行の濁音化が特徴である。1番から6番の歌詞の最後に「ハ ソレソソソソソソ」が置かれる。

3.2 《田植踊うた》の特徴：旋律・掛け声・お囃子楽器 (1) うたの旋律について

「うた」と三味線が奏でる旋律には、重なる部分が多いため、録音物の楽譜化に際し、2つの三味線用記譜を参照した。三味線文化譜に5線譜が付されている『津軽三味線小山貢民謡集 第二集』では4分の2拍子で作成され、『藤本秀丈民謡選集 九』の三味線文化譜(節付譜

入)』では四分ノ二拍子(はづむ)と演奏上指示が与えられていた。2拍子系の音楽であるが、筆者が採譜した「うた」の旋律は、8分の12拍子にした(譜例1)。旋律は、日本民謡で使用される典型的な民謡音階(ドーミbーファーソーシbーード)で構成されている。

(2) 2種類の掛け声とその役割

《田植踊りうた》には、2種類の掛け声が入る。楽譜上「掛け声」は、音程のない音として表記されるため、譜例2の音高の配置は目安である。

1つ目の「掛け声」は、《田植踊りうた》の1番から6番の歌詞の最後に置かれる「ハ ソレソレソレソレ」である。演奏録音では、ひとまとまりで「掛け声」となる。この掛け声は、歌詞1番の歌い始めの前に置かれる「序奏」、1番から2番の歌詞へとつなぐ「間奏」(または2番歌い始めの前に置かれる「序奏」)が6番の歌詞までに5箇所、そして6番の歌詞の後に置かれる「後奏」、全7箇所に入る。唄い手とお囃子担当1名による掛け声「ハ ソレソレソレソレ」は序奏と後奏に入り、間奏(つなぎ)ではお囃子担当者1名が掛け声を入れている。これらの「掛け声」は、音楽のはじまり、中(つなぎ)、おわりを意味する合図である。

2つ目の「掛け声」は「ハ」である。この「ハ」は《田植踊りうた》の歌詞には記載されていない。三味線音楽では、演奏中によく耳にする掛け声の類である。音源を聴くとこの掛け声「ハ」は、男性の声であるためお囃子(打楽器担当)1名による。掛け声「ハ」は□で囲まれた字の後に入り、入り方に歌詞の文字数と関係があると思われる。「それなやーい」に続く1番から5番の歌詞は6文字(朝よはがの、なにを松と、若よ松の、巢よのなかを、一つ取りて)、7文字目の代わりに掛け声「ハ」が置かれる。6番の歌詞「呼ぶも呼んだし(7字)」にはこの掛け声が入らないことから、合いの手のような掛け声「ハ」が、語呂合わせ的な役割を担っていると思われる。上述した《田植踊り唄》や《田植踊り唄》の歌詞資料からは、掛け声(ハ ソレソレソレソレ)に関する情報は得られなかった。三味線音楽に由来するものかどうか不明であるが、うたとお囃子に2種類の「掛け声」が合わさって、田植踊り音楽の賑やかさが表現されていたのではないかと推測される。

(3) お囃子楽器(太鼓・摺鉦)について

《田植踊りうた》には、三味線以外に2つの打楽器(太鼓・摺鉦)が演奏に加わる。譜例2は、掛け声「ハ ソレソレソレソレ」と太鼓のスコア(総譜)である。演奏録音時の画像や動画を確認できないため、バチの使い方、バチ捌きで生じる音の種類とバチで打つ場所、楽器数(1

台または2台)²⁶などを把握した記譜ではない。しかし「うた」の前に置かれる序奏(A)と1番と2番の間奏(B)では音の違いを識別できたため、可能な範囲で採譜を試みた。序奏(A)は太鼓のフチ(木製)を叩く音、間奏(B)は2本のバチを使い、両手で、同時に、太鼓中央に張られている皮の部分を叩いている音である。譜例2・間奏(B)は、掛け声に続き2番の歌詞に入る箇所である。

譜例3は、うたと摺鉦のスコア(総譜)である。摺鉦はリズム譜(骨組み)で示しているが、音の響きは単一ではなく、繊細な音の重なりが聴こえた。摺鉦の特徴は、常にリズム・パターンが一定で規則的であるため、音楽全体の拍子を司る役割をもっていると思われる。

おわりに

本稿では、昭和47(1972)に作成された『田植踊り保存会設立趣意書』から、より詳細な生保内田植踊りの起源と伝承概要を把握することができた。生保内地区に伝承され、芸能化されていった「田植踊り」は唄・お囃子音楽・踊りが一体となって演じられる民俗芸能である。初めに唄・民謡に注目した。

岩手県北上市《口内田植踊り》の演目冒頭「朝よはか」の詩章から、秋田県内の田植歌/唄や田植踊り等の歌詞資料を確認した結果、類似性以外に、歌詞の多様性が確認された。現在、生保内田植踊り音楽の伝承の源とされる田口キヨノが歌う《田植踊りうた》の音源資料から楽譜化を図り、音楽的特徴を考察した。その結果《田植踊りうた》の旋律には民謡音階が使用されている点、うたの歌詞に含まれるハ ソレソレソレソレが、演奏上では「掛け声」であることがわかった。この他に、お囃子(打楽器)担当者が、語呂合わせ的に発する「掛け声」の存在を見いだすことができた。以上、これらの考察結果を出発点として、今後は「生保内田植踊り保存会」の音楽と踊りの伝承者たちが奏で、演じる芸能に関する調査を進めていく。

謝辞:本研究は生保内田植踊り保存会会員の皆様のご協力、実施することができました。この場を借りて、御礼申し上げます。

付記:本研究は、公益財団法人前川財団の研究助成(2021年度)を受けて実施した。

【譜例1】 うた

採譜：吉澤恭子

♩ = 100

うた



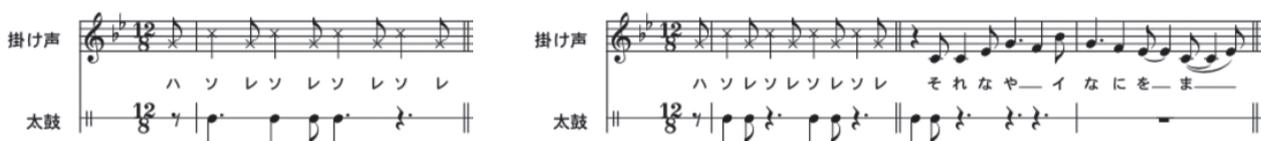
1. それなや—イあ さよ—は— が の— い— ち の— みなぐ
ち— に— お— いた る ま— つ— は— な— に ま つ (ハ)

【譜例2】 掛け声と太鼓

序奏 (A) 太鼓はフチを叩く音

間奏 (B) 太鼓は皮の部分叩く音 掛け声に続き2番の歌詞に入る箇所

掛け声



ハソレソレソレソレ
太鼓

掛け声

ハソレソレソレソレ それなや—イなにを—ま—
太鼓

【譜例3】 うたと摺鉦

採譜：吉澤恭子

♩ = 100

うた



1. それなや—イあ さよ—は— が の— い— ち の— みなぐ
ち— に— お— いた る ま— つ— は— な— に ま つ (ハ)

注

- 平成25(2013)年まで会長を務めた。その後、佐川隆雄氏が引き継ぎ、現在に至る。
- 「民俗文化財公開交流事業」『教育あきた』(2017年3月号) No.736, p.5.
URL: <https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/22963>
- 「伝統の踊り楽しむ 児童ら石神番楽など披露」『秋田さきがけ』(伊藤康仁), 2019年(令和元年)10月25日金曜日21面。『教育あきた』(2020年3月号) No.748, p.8.
URL: <https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/48187>

- 『小学校学習指導要領解説(平成29年告示)体育編』p.147によると、日本の民踊とは、それぞれの地域で親しまれている民踊や日本の代表的な民踊をさす。歌詞に伴う手振り、低く踏みしめるような足どりと腰の動き、輪踊り、一人踊りが多いなどの日本の民踊に共通する特徴をもつ踊りとして示されている。
- 菊池和博(2006)「東北の田植踊りの起源・伝播に関わる基礎的研究—山形県上山市の金生田植踊り起源論を端緒にして—」『東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要』第6号, p.81.
- 「あきた民謡が聴こえる・生保内田植踊り(田沢湖町)」

- 『秋田さきがけ』2004年（平成16年）1月6日火曜日9面。民族芸術研究所（田沢湖町）の小田島清朗氏（53）の解説による。
- 7 原本を元に、「仙北市無形民俗文化財申請書（平成9年3月付）」（生保内田植踊り保存会所蔵）の記載内容も参考にした。一部の括弧内に説明を追加、句読点等を付し微調整している。
- 8 早苗饗（さなぶり）。田植えが終わって田の神を送る行事または田植えが終わった後の慰労会をさす。対比表現として、田植え初めに田の神を迎える行事は「早降（さおり）」という。
- 9 柄振・杵（えぶり）。田植え前に、田を均す農具のこと。エンブリとは、金輪をつけた「ジャンギ」と呼ばれる棒をさす。このジャンギが田植え前に田を均すのに用いる柄振・杵（えぶり）という農具に起源をもつものであるため「えんぶり」と呼ばれるようになったと伝えられる。
- 10 田植えの前の田おこしの準備として、稲の収穫時に刈り残った切り株を踏みつける農具のこと。
- 11 近世、南部氏が領有した地域。現在の岩手県中・北部および青森県東部を指す。
- 12 「あきた民謡が聴こえる・生保内田植踊り（田沢湖町）」『秋田さきがけ』2004年（平成16年）1月6日火曜日9面。
- 13 長野隆之（2007）『語られる民謡 歌の「場」の民俗学』瑞木書房、p.195。岩手県下には「葛根田田植踊り（岩手郡雫石町下長山）」以外に、菅生田植踊り（大船渡市立根町菅生）、田茂木田植踊り（東磐井群室根付折壁）、上幅田植踊り（水沢市）、南都田田植踊り（胆沢郡胆沢町南都田）、煤孫田植踊り（和賀郡和賀町煤孫）、荒屋田植踊り（和賀郡江釣子村荒屋）、内村田植踊り（柴波軍都南村飯岡）、平笠田植踊り（岩手郡西根町田頭）、黒内田植踊り（岩手郡岩手町一方井黒内）、綾織田植踊り（遠野市綾織）、上柳田植踊り（遠野市附馬牛）、松崎田植踊り（遠野市松崎）、来内田植踊り（遠野市上郷町）、暮坪田植踊り（遠野市上郷町）に田植踊組があるとし、それらの田植踊りを調査の対象としている。
- 14 前掲書、p.196。
- 15 雫石町指定無形民俗文化財《葛根田田植踊り》はYouTubeで公開されている。
URL：<https://www.youtube.com/watch?v=ilucAYKO5Mw>（2012/01/28公開）
- 16 秋田・みんよう企画（2014）「秋田田植踊り唄」『限定版 日本の民謡 全国民謡歌詞集解説付』秋田・みんよう企画、p.165。
- 17 秋田県教育委員会（1968）『秋田の田植習俗』秋田県文化財調査報告書13、平凡社、pp.25-26。
- 18 秋田県民俗芸能協会十周年記念誌編纂委員会編（1980）『秋田県民俗芸能誌』（秋田県民俗芸能協会十周年記念刊）秋田県民俗芸能協会事務局、秋田活版印刷株式会社、p.184。
- 19 藤尾隆造（1980）『むかし、いま 秋田民謡』フジオ企画、秋田活版印刷株式会社、pp.24-27、pp.118-119。

20 前掲書、p.119。

- 21 秋田・みんよう企画（2014）「秋田田植踊り唄」『限定版 日本の民謡 全国民謡歌詞集解説付』、p.165では、唄い出しの歌詞について「ソレナヤーエと歌われているが、正しくはソレナヤーエである。」と説明がなされている。
- 22 生保内田植踊り保存会会長・佐川隆雄氏から、事務局・黒澤文喜氏を通じて、2022年12月3日に電子メールで受け取った情報による。
- 23 全29曲中1曲《さんさ節》を除く。2022年12月5日確認。YouTubeでは、CDブックレットに記載されていない曲目解説が、故田口秀吉氏によって与えられている。
- 24 インタビューによる。2022年10月28日、仙北市田沢湖総合開発センター於。
- 25 生保内田植踊り保存会会長・佐川隆雄氏から、事務局・黒澤文喜氏を通じて、2022年12月3日に電子メールで受け取った情報による。
- 26 2021/2022年度の現地調査では、田植踊り保存会のお囃子に太鼓奏者（1名）がいる。使用楽器数（1台もしくは2台）によって、バチ使いや奏法が異なっているのを確認している。

参考文献

- 秋田県『広報誌 教育あきた』
URL：<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/genre/15332>
- 秋田県（2019）『第2期あきた文化振興ビジョン』
URL：<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/40564>
- 秋田県教育委員会（1968）『秋田の田植習俗』秋田県文化財調査報告書13、平凡社、124p。
- 秋田県教育委員会（1993）『秋田県の民俗芸能－秋田県民俗芸能緊急調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第227号、秋田県教育委員会、343p。
- 秋田県民俗芸能協会十周年記念誌編纂委員会編（1980）『秋田県民俗芸能誌』（秋田県民俗芸能協会十周年記念刊）、秋田県民俗芸能協会事務局、秋田活版印刷株式会社、247p。
- 生保内田植踊り保存会『元祖田植踊石神保存会々則（案）』昭和44年2月25日。
- 生保内田植踊り保存会『田植踊保存会設立趣意書』昭和47年2月15日。
- 桂博章（2015）「秋田県における民俗芸能の伝承」『秋田学・白神学総合成果報告書』（平成22年4月～平成26年9月）、秋田大学教育文化学部秋田学・白神学研究運営委員会、pp.56-90。
- 公立大学法人 国際教養大学 地域環境研究センター『秋田民俗芸能アーカイブス』秋田県内における民俗芸能の調査研究事業 総合報告書、平成25年3月、52p。
- 「仙北市田沢湖・石神地区住民 番楽、田植踊り後世へ 無形文化財の碑建立」『秋田さきがけ』（菅原潤）、2011年（平成23年）4月15日金曜日19面。
- 長野隆之（2007）『語られる民謡 歌の「場」の民俗学』瑞木書房、374p。CD付。

真壁昌弘 (1992) 『日本歌謡の研究－『閑吟集』以後－』
桜楓社.

森口多里 (1971) 『岩手県民俗芸能誌』錦正社.

文部科学省『小学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 音楽編』平成 29 年 7 月

文部科学省『小学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 体育編』平成 29 年 7 月

文部科学省『中学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 保健体育編』平成 29 年 7 月

文部科学省『中学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 音楽編』平成 29 年 7 月

映像・音源資料・楽譜

公立大学法人国際教養大学アジア地域研究協力機構運営「秋田民俗芸能アーカイブス」

URL : <https://www.akita-minzoku-geino.jp/archives/ja/>

国際教養大学・秋田民俗芸能「生保内田植え踊り」

URL : <https://www.youtube.com/watch?v=31F1YAU6bs4>
(2013/01/28 公開)

田沢湖町郷土芸能振興会『田沢湖の古民謡』(CD) 田沢湖町郷土芸能振興会, 平成 5 年 6 月.

「00 田沢湖の古民謡 主旨説明」

URL : https://www.youtube.com/watch?v=e_5_3ubYiLI
(2022/04/03 公開)

「12 田沢湖の古民謡《田植え踊り唄》」

URL : <https://www.youtube.com/watch?v=QbuXApRvHWA>
(2022/05/31 公開)

小山貢 (1979) 『三味線文化譜・五線譜付 津軽三味線小山貢民謡集 第二集』邦楽社.

藤本琇丈 (1971) 『三味線文化譜 (節付譜入) 藤本琇丈民謡選集 九』邦楽社編集部編』邦楽社.